「現代詩／詩論研究会」第二回

現代詩論の時代

――鮎川信夫「現代詩とは何か」と『荒地』

二〇一三年一月五日（土）加藤邦彦

於・梅光学院大学編集工房

■「詩論」の時代としての現代

※三浦仁編『日本近代詩作品年表』明治篇・大正篇・昭和篇（秋山書店）、国立国会図書館NDL-OPAC、日本近代文学館　図書・雑誌検索などを参照。

○「現代詩」……用例は明治時代より多数あり。

・松原至文「一面観――現代詩人の自然観」（「白鳩」一九〇五年一一月）

・西出朝風「短歌と現代詩」（「創作」一九一三年九月）

・『現代詩選』（新潮社、一九二〇年一〇月―一九二二年四月）→「百田宗治詩集」「川路柳虹詩集」「富田砕花詩集」「柳沢健詩集」

○「現代詩論」……「詩論」は多数の用例があるが、「現代詩論」については用例は戦後までほとんどなし。

・詩文学社編『現代詩論集』（『現代芸術叢書』第四篇、現代評論社、一九三一年）

・『ユリイカ新書　現代詩論シリーズ』（ユリイカ、一九五五年六―九月）→大岡信『現代詩試論』、中村稔『宮沢賢治』、関根弘『狼がきた』、杉本春生『抒情の周辺』

・『現代詩論大系』（思潮社、一九六五―六七年）

※「詩論」によって特色づけられる現代／現代詩。

※「戦後詩」という呼称は『戦後詩人全集』（ユリイカ、一九五四年九月―一九五五年五月）、「詩学」臨時増刊「現代詩・戦後十年」（一九五五年六月。座談会「戦後詩の新しい展開」、鮎川信夫「戦後詩人論」、大岡信「戦後詩論の焦点」が掲載）辺りから。小海永二『日本戦後詩の展望』（研究社出版、一九七三年一〇月）参照。

＊「現代詩論」＝戦後において詩論が詩論として自立するようになったあらわれ

《資料1》北川透「荒地の詩人と危機の時代――「虚構」の論理と「生活圏の論理」（「日本図書新聞」一九六四年六月一五日、引用は「鮎川信夫全集月報Ⅴ」より）

ぼくらは戦前において、朔太郎以外には、詩の啓蒙や解説としての詩論ではなく、詩を中核に包みながら、それ自体がどうしようもなく思想論として自立するような詩論を持つことがなかった。戦後詩において、鮎川信夫の詩論が、位置するところは、まさにそれである。彼の詩論は戦後詩の根幹を支える「詩の原理」であり、朔太郎以上に苛烈に、戦後世界の危機を、受像することによって、思想論しても、まったく独自に自立を遂げている。

＊「詩」と「詩でないもの」をつなぐものとしての「現代詩論」

【本文1】「Ⅰ　詩人の条件」（『荒地詩集1951』）

われわれは詩を、――詩そのものを、単独に切り離して論ずることが出来るだろうか。それは勿論不可能である。しかるに詩そのものを、それだけ切り離すことが出来るかのように、詩を他から孤立した一概念、或いは絶対化した一形式として取り扱おうとする傾向が、いまだに根強く存在している。そして詩論の中で語られる詩の法則は、たいてい詩の実作のあとからうまれ、経済学者や歴史家のつくった社会法則のように、決してわれわれの前にではなく、常にわれわれの後から現れるものである。こうして定められた詩の法則は、しばしば一般に詩が不変の概念であるかのような錯覚を与えてしまう。

【本文2】「Ⅰ　詩人の条件」

素朴に言つてわれわれの日常生活は、詩よりも詩でないもののうちに多く生きているように見える。しかしわれわれが、われわれ自身を見出すのは、あくまで言葉の上に於てである。「詩といふ概念が成立するのは、詩と詩でないものとの境界に於てある。詩と詩でないものとの間に生きている人間にとつて、彼を詩に駆り立てるものはむしろ詩でないものである」という意見は、われわれが詩を書く立場をよく示している。われわれを詩に駆り立てるものは、詩そのものの空虚な美的価値の世界にあるのではなく、詩でないもの、つまりわれわれが生きている現実の生活の中にあるのだ。

※かぎ括弧内は黒田三郎「詩の難解さについて」（「詩学」一九四九年四月）からの引用。「詩の難解さについて」は「民衆と詩人」とともに「詩人と運命」という題で『荒地詩集1952』に収録。その後、『内部と外部の世界』（一九五七年一〇月）に所収。

※それまでの詩は、社会や日常生活から切り離され、「空虚な美的価値の世界」で完結してい

た。しかし、「われわれを詩に駆り立てるもの」は「われわれが生きている現実の生活の中」にこそある。また、「空虚な美的価値の世界」で完結していた詩においては、つねに詩論は詩に従属するものであり、後発的なものでしかない。そのような考えを「不変の概念」にせず、「詩と詩でないもの」をつなぐことこそ、この文章（＝現代詩論）の使命である、ということが主張されている。つまり、詩作よりも詩論の側から「今、詩を書くこと」の意味を問うている。

＊引用あるいは問テクスト性について

《資料2》大岡信「戦後詩論の焦点」（「詩学」一九五五年）

一般に鮎川氏が〈荒地〉グループの代表的な詩論家と考えられているようだが、鮎川氏の詩論は必ずしも論理的に明瞭ではない。むしろ、黒田、木原両氏のエッセーの方が〈詩と詩でないものとの境界〉について明瞭に語っている。黒田氏の場合にはこれは詩人の生き方という形で問題になり、木原氏の場合にはメタフィジックな〈秩序〉の考察を通じて問題になっている。いわば鮎川氏が詩の周囲を旋回的にめぐりながら、しばしば自己閉鎖的な独断に陥る危険を冒しているとき、黒田氏は〈己れの鈴虫籠を離れては何ら取柄のない詩人〉になることに警告を発している。一方木原氏は〈種々雑多な『現代的庶物』に生活が占領されてしまっている時に覚えるひとつの乾き〉こそ詩を必要とする状態だとし、この〈乾き〉に応ずべきものとして、内的経験と外的経験とが形づくる秩序に対応する秩序をもった詩という概念を提示する。〈荒地〉グループの詩人たちは、総じて自由主義者、個人主義者の立場に立つといえようが、以上三氏の詩論は、同じグループにあっても詩に対する観方、重点のおき方がそれぞれ異なっていることを示している。

※にもかかわらず、どうしようもなく没個性的、というよりは集約的に感じられてしまう鮎川の詩論。

《資料3》野村喜和夫・城戸朱理・佐々木幹郎「起源・反起源　吉岡実・堀川正美」（『討議　詩の現在』思潮社、二〇〇五年一一月）

佐々木　（前略）「荒地」というのは、鮎川信夫、田村隆一、それから北村太郎や他の詩人も含めて、すごく詩語の交流関係があって、それこそオリジナリティをほとんど無視したグループなんです。たとえば「立棺」という詩は、いちばん最初は中桐雅夫が考えて、それをもらうよっていう感じで田村さんがつくる。そういうかたちのやりとりをしょっちゅうやっていて、そこが独特なんですね。（中略）鮎川さんも戦後初期の詩論でエリオットを引いて、オリジナリティは詩にとって大切ではないと言いましたが、言葉をやりとりしていた時代的な共同の感性があって、そのことによっていろんな角度で詩の言葉が鍛えられたというのがあります。「荒地」というのはそういうグループと考えていいと思います。

《資料4》北村太郎・大岡信・菅野昭正・長田弘「討議　生の経験と感情　鮎川信夫の詩と詩論」（「現代詩手帖」一九七五年八月）

大岡　「現代詩とは何か」とか、鮎川さんが戦後広い読者に向かって書いた最初の時期のいくつかの長篇評論というのは、だいたいさっき北村さんが言われていたように、俺達はこういうことをやっているのだ、ということの説明のために、自分達のグループの詩を次々と引用していたわけだけど、あそこで引用されている詩はもう恐るべき感じがしましたね。これで参っちゃったという感じがあるね。（中略）

長田　あれは批評の一つのスタイルというのをたしかにつくったですよ。それだけじゃなく、引用の名手として、現実からの引用というのも非常に効果的に使いますよね。（中略）引用ということは、鮎川さんにとっては本質的な行為だった。下敷きにするというのじゃなく、パロディ化するというのでもなくてね。その部分を生きちゃったみたいな引用として、引用の部分がすごく際立ってますね。（中略）

大岡　詩のグループの同人間のつながりの強さという意味で言うと、「荒地」は例外的に強かったということもあると思うんですね。

長田　それが引用というものを、切り貼りというようなことじゃなしに、引用の仕方そのものにすごく意味をこめえた。その引用の源と言うか、共通の感覚というのと密接に関係してるんでしょうね。たがいに信頼感がね。『魔の山』の引用で、その引用にこめられた意味を共有出来る、目頭をおさえるというような感情を共有出来た。鮎川さんの引用という行為は、そうした感情の共同体のなかから生まれてきたものだったと言えますね。

※相互影響の問題。「われわれ」という複数人称の問題とも関連あり。この「われわれ」という人称が周囲に与えた印象とは？　また、それに隠蔽されてしまった（かのようにみえる）それぞれの詩人の差異とは？

《資料5》瀬尾育生『鮎川信夫論』（思潮社、一九八一年六月）

もともと《無名にして共同なるもの》ということばは、『魔の山』の登場人物のひとり、中世主義者

にして戦闘的なカトリック教徒、イエズス会士でありテロリストでもあるというナフタのことばからとられており、それ自体カトリック的な理念なのだった。

■基本事項の確認

「現代詩とは何か」……全六章構成

Ⅰ　詩人の条件→初出「人間」第四巻第七号、一九四九年七月、タイトル「現代詩とは何か」

Ⅱ　幻滅について→初出「詩学」第四巻第九号、一九四九年一二月、タイトル「詩人の条件（1）」

Ⅲ　祖国なき精神→初出「詩学」第五巻第二号、一九五〇年二月、タイトル「祖国なき精神――詩人の条件（2）」

Ⅳ　なぜ詩を書くか→初出「詩学」第五巻第三号、一九五〇年四月、タイトル「なぜ詩を書くか――詩人の条件（3）」

Ⅴ　詩と伝統→初出「詩学」第五巻第五号、一九五〇年六月、タイトル「詩と伝統――詩人の条件（4）」

Ⅵ　詩への希望→初出「詩学」第五巻第六号、一九五〇年七月、タイトル「詩への希望――詩人の条件（5）――」

→全篇「現代詩とは何か」として『荒地詩集1951』（早川書房、一九五一年七月）の「Ⅱ　エッセイ」に収録。

※「詩学」については『戦後詩誌総覧②　戦後詩のメディアⅡ』（日外アソシエーツ、二〇〇八年一二月）を参照。ちなみに、第五巻第一号に掲載がないのは「特輯　現代詩への提言（各誌の立場より）」（鮎川も「現代詩への提言」を寄稿）、第五巻第四号に掲載がないのは「全国詩雑誌推薦詩人集」のためと思われる。

＊異同・改稿について

《資料6》「Ⅰ　詩人の条件」初出（「人間」一九四九年七月）

われわれは詩を、――詩そのものを、詩自体を、それだけ切り離して論ずることが出来るだらうか。それは勿論不可能なことである。しかるに詩そのものを、それだけ切り離して論ずることが出来るかの如く、詩を他から孤立した一概念、あるひは絶対化した一形式としてのみ取り扱はうとする傾向が、いまだに根強く存在してゐる。そして詩論と呼ばれるものの中で語られる詩の法則は、たいてい詩の実作のあとからうまれ、経済学者や歴史家のつくつた社会法則のやうに、決してわれわれの前にではなく、常にわれわれの後から現れるものである。かくして定め立てられた詩の法則は、それ自体はわれわれに害を与へるものではないが、それは屢々一般に詩が不変の概念であるかのやうな錯覚を与えてしまふ。

※【本文1】参照。細かな異同多数あり。

【本文3】「Ⅰ　詩人の条件」

「わが骨もくだくるばかりにわが敵はひねもす我にむかいて、なんじの神はいずくにありやといいののしりつつ我をそしれり」

詩篇の作者が歌つたこのような神を見出すことこそ、この侮蔑の時代に生きる詩人の願いである。神という、この大きな空虚を抱いて、現代の「荒地」に詩人が、なお歌いつづけてゆけるとしたら、それは詩人の勝利である。

※後半の段落、初出にはなし。

※「現代詩とは何か」にはその後も手が加えられている様子で、たとえば『鮎川信夫詩論集』（思潮社、一九七二年五月）所収の本文とは異同が多数ある。

《資料7》宮崎真素美「鮎川信夫研究の現在」（『鮎川信夫研究――精神の架橋』日本図書センター、二〇〇二年七月）

そして、現在鮎川研究における急務と考えられるのは、作品校異の作成である。この点については、拙論（中略）において論究対象とした作品の校合結果を、論旨に即した範囲で紹介しているが、さらに全作品にわたる体系的な作業が必要であることは言うまでもない。これら拙論の作業の中で知られるのは、鮎川が初出、再録、再々録とヴァージョンを重ねるごとに細かく詩句の改変を行っている点である。作品を論ずる上で、これら改稿過程から見えてくる問題は決して小さくはなく、前述したような伝記的な側面においてばかりでなく、詩作者鮎川の新たな相貌を照らし出す重要な要素を作品そのものが多分に内包していることに、我々はさらに自覚的になるべきだろう。

《資料8》北川透「〈荒地〉の文明批評的性格をめぐって」（『荒地論――戦後史の生成と変容』思潮社、一九八三年七月）

転載と改稿という表現のもつ運動性は、（中略）「荒地」の初期同人たちの作品やエッセイの成立過程が、共通に持っている性格である。むろん、現象としてのそれは、あまり人目につかない雑誌から、比較的多くの人の眼に触れる場所へ出現していく過程に過ぎないだろう。敗戦直後の詩ジャーナリズムの未成熟ということも関係しているかも知れない。しかし、それらの現象を通して、鮮明に浮き上がってくるのは、いわば「荒地」の詩人たちが、それぞれの多様な個性を、それとして生成する過程が、同時に、〈荒地〉という詩的な共同性、その共感の磁場の形成と緊密に重なりあっているという問題である。（中略）

おそらく『荒地詩集』一九五一年版とは、同人たちの過去数年の作品やエッセイを集めたというだけにとどまらない。それは〈荒地〉の詩的共同性、その共感の磁場の生成過程、それらの運動域自体を集約するという意味を、客観的にはもたらされてしまったのだ。幾つかの雑誌を舞台にした〈荒地〉の詩的共同性は、いってみれば混沌たる生成の段階を、みずから集約することにおいて、完結させてしまった、とみることはできないか。

《資料9》鮎川信夫「『荒地』に関する二つのエッセイ」（『荒地詩集1955』）

「荒地」が現代詩の世界において、バラバラに分離していた各要素を結合させて「共感の場」をつくり出したことは、今後の詩の発展にとつても、また「批評の場」を活潑にする上にもいろいろ役立つにちがいないと思う。（中略）

現代詩のtouchstoneとしての役割を少しでも果したことが認められるなら、運動としての「荒地」はその目的の半ばを達したと言つてもよい。（中略）しかし、言うまでもなく、僕達にとつて運動が全てではない。すべてではないどころか、文学運動としての今までの「荒地」の外観は、僕たちここの詩的活動の背景から生れた単なる副産物にすぎないのである。このことは、（中略）何よりも「荒地」の個々の詩人の在り方が、それを証拠立てていると思う。それに、ある意味では、文学運動としての「荒地」は、一九五一年版で終つている。

＊「Xへの献辞」との関係

※『荒地詩集1951』は巻頭に無署名「Xへの献辞」、「Ⅰ　詩」に「橋上の人」（「死んだ男」「アメリカ」（「アメリカ覚書」）「白痴」「繋船ホテルの朝の歌」「橋上の人」）、「Ⅱ　エッセイ」に「現代詩とは何か」を収める。

【本文4】「Ⅰ　詩人の条件」

われわれにとつて唯一の共通の主題は、現代の荒地である。戦争と戦争に挟まれた時代に生き、一度は戦場に生身を賭けたわれわれは、今もなお暗い現実と引き裂かれた意識から脱することが出来ずに、冷たい戦争の成行きを見守つている。われわれの生活は、ヨーロッパやアメリカのような共通理念としての〈文明〉というものを持つていなかつた。伝統のないところによく言われる植民地的文化の雑草が生えていただけである。守らなければならないところの〈文明〉を持たない民族にとつては、戦争も天災地変のような偶然の災難であつたに過ぎない。

戦争という共同体験を持つことによつて戦後の荒地に生き残つたわれわれは、われわれ自身の生活と共に、新しい時代の課題に直面することになつたのである。そして第一次大戦後の荒廃と虚無の中からエリオットの『荒地』が生れたのは一九二三年であるから、今では四半世紀以上の年月が経過しているにも拘らず、依然として現代に於ける荒地の不安の意識は去らないのである。「破滅的要素に浸れ、それが唯一の道である」と言つたステイーヴン・スペンダーの言葉と共に、われわれは荒地のなかに、描かれた文明の幻影のなかに、われわれを救うものを求めて入つていつたのである。

《資料10》無署名「Xへの献辞」

現代は荒地である。そして僕達は、それが単に現在的なものの徴候によつてのみ、充分に測定され得るものとは思つていない。現代社会の不安の諸相と、現代人の知的危機の意識は、その発端を、過去という記憶と資料の援けをかりなければならない世界に有している。科学の進歩に追随し、或は経済学に対する課題的要求が強まれば強まるほど、僕等の生活は惨めなものとなり、現代の空はますます暗澹としてくるのである。人間が機械に隷属し、個人が集団の中に解消せしめられる時代、そして人類を破滅の淵に追い落す戦争恐怖の時代、――かかる時代に空を仰ぐ者は、人類の文化に対して、自分がある精神的不安の血を受継いでいることを感じとるに相違ない。

そして彼が、さらにこの二十世紀の半ばに立つ人間の運命について深く考えるならば、そこに人類の遺産と罪の伝承を認めることによつて、荒地に生きているという暗い経験世界の終末的な幻滅感から一条の光線を摘みとることだろう。亡びの可能性は、一種の救いに外ならぬ。なぜならばそれは遂にこの生に何等かの意義を与えるからである。破滅からの脱出、亡びへの抗議は、僕達にとつて自己の運命に対する反逆的意志であり、生存証明でもある。

《資料11》北川透「〈荒地〉の文明批評的性格をめぐって」

ここには、「荒地」の詩人たちの多くを戦場に拉致せしめ、また、同時代の親しい者たちを死に至らしめ、国土を荒廃せしめた、この日本とは何かというまなざしがみごとなほど欠けているのである。従って、現代社会の不安や、その知的危機の意識が〈荒地〉として語られながら、彼らがそこに足をつけ、呼吸している戦後（社会）に対する触感や体感というようなものは、きれいに消えていかざるをえない。第一次大戦後のヨーロッパの戦後意識によって培養された《終末的な幻滅感》とか《亡びの可能性》というような、いってみれば擬似的戦後意識が、相対化されるためには、いちどは素手で戦後の廃墟の中に立ってみる必要があっ

たのである。

※戦前、欧米のような「共通理念としての〈文明〉」を持たなかった日本。そこで得られた「戦争」という共同体験。その体験は「現代は荒地である」という「不安の意識」、「終末的な幻滅感」を人々にもたらした。しかし、もともとは「第一次大戦後のヨーロッパの戦後意識によって培養された」これらの意識は、それまで「共通理念としての〈文明〉」を持たなかった日本において、はじめて「擬似的」でなく、実感的に得られたものでもある。その意識から逆説的に「われわれを救うもの」、「この生に何等かの意義を与える」ものを得ようというのが「われわれ」の立場。

＊「Xへの献辞」と「現代詩とは何か」の共通性と差異性

《資料12》北村太郎『センチメンタルジャーニー』

これは、五人だけの四八年版『荒地詩集』のときに書いたもので、よく覚えています。たしか杉並区の黒田のアパートに集まったときだったと思いますが、献辞を作ろうということになって、鮎川に執筆を頼んだ。鮎川が「できたよ。諸君、聞いてくれよ」と自分の草稿をもってきて読んだ。ぼくはそれを聞いてすっかり感心した。たしか一カ所変えただけで、これを五人のアンソロジーのトップにそのまま載せようと決めたんです。むろん無記名の文章だけれども、これはすぐに鮎川の文章だと分かる。

※一九四八年版『荒地詩集』は刊行されず。また、「Xへの献辞」は月刊「荒地」第六号にも掲載予定だったが、掲載されなかった。《添付資料A・B》参照。

《資料13》鮎川信夫・中桐雅夫・黒田三郎・三好豊一郎・北村太郎・木原孝一「「荒地」の意図と成果」（「現代詩手帖」臨時増刊、一九七二年一月）

鮎川　あの頃はみんないつも会っていた。みんなが言っていたことをある程度まとめた、というか集めて書いたものだね。だからひとつの人格として見ると、かなり矛盾したところもある。

《資料14》中桐雅夫・鮎川信夫・黒田三郎・田村隆一「「荒地詩集」をいかに読むか」（『荒地詩集1952』）

附記　「荒地詩集」五一年版には鮎川信夫のエッセイ「現代詩とは何か」が掲載され、われわれの詩についての解説的な役割りを果した。五二年版ではこのような形で、われわれがわれわれの詩について話しあつたありのままを発表することにした。（中略）われわれの詩に対する態度、われわれが平素なにを考えているか――というような点について、読者に若干の参考資料を提供できたと思う。

※「現代詩とは何か」で言及されている詩篇が『荒地詩集1951』の「Ⅰ　詩」に多数収録されている。

《資料15》中桐雅夫「「荒地詩集」批判に答へる」（「詩学」一九五二年二月。引用は「現代詩手帖」臨時増刊、一九七二年一月より）

われわれが最も関心を抱いてゐるのは詩作品である。（中略）われわれは、われわれが書く詩の技術、いかに書くか、といふ問題を常に考へてゐる。詩と言葉の問題、詩とイメエジの問題、さういふことを「ぐんぐんほり下げて、日本語で詩を書くものとして、血のにじむやうな苦しみをしてゐる」のである。「荒地詩集」に収録された鮎川信夫の「現代詩とは何か」といふエッセイが、このやうな観点からの詩論ではないといふ批判は、実は批判にも何にもなつてゐない。評論は常にある内部的、外部的要請に応へて書かれるものであり、その限りにおいて、ある評論によつてすべてを尽すことはできないからである。われわれが「荒地詩集」にわれわれの詩の方法論を収録しなかつたのは「現代詩とは何か」にふれてゐない「荒地」の詩法いかんといふ問題は、偏見にとらはれてゐない読者ならば、「荒地詩集」所載の詩作品によつて、容易に解答できると信じたからである。

《資料16》北川透「荒地●その共同理念の軋み――「Xへの献辞」をめぐって」（「現代詩手帖」一九七三年二月）

一九五一年版『荒地詩集』のエッセイ「現代詩とは何か」の中で鮎川信夫は、「Xへの献辞」の無性格な抽象性をはみだしたところでよく語っている。しかし、先にも書いたように、わたしが「Xへの献辞」を書かなければならなかった鮎川を不幸だと思うのは、この「現代詩とは何か」の中でも、結局は《荒地》の詩人の作品を、その共同理念化の素材として扱う批評に終始してしまっているからである。〈荒地的なもの〉の呪縛からむしろ個々の作品を解き放って、それを個へ返すようにこのエッセイは書かれず、共同なるものへ、〈荒地的なもの〉へと、同人の多種多様な作品が収斂していくように論理は展開される。

《資料17》牟礼慶子「秋のオード」（『鮎川信夫　路上のたましい』思潮社、一九九二年十月）

『荒地詩集1951』の巻頭に付された「Xへの献辞」は、一九五一年の詩的状況よりも、一九四八年のさまざまな情景を思い描いて読むにふさわしいものと思われる。一九五一年ともなると、日本経済はやや復興の兆を見せ始め、マチス展・ピカソ展が相次いで開かれ、メニューヒンが来演するなど、

文化活動も盛んになっていた。（中略）

一九四八年の頃は、戦争で壊れた世の中はまだ整えられないままの状態だったように思う。（中略）その一九四八年に、雑誌に書き継がれていたのが、埴谷雄高「死霊」、野間宏「崩壊感覚」、大岡昇平「俘虜記」、安部公房「終りし道の標べに」、椎名麟三「永遠なる序章」である。武田泰淳は前年「蝮のすえ」、この年には「『愛』のかたち」を発表していた。

『荒地詩集1951』に初めて掲載された「Xへの献辞」は、実は、それら戦後派作家の小説の生まれた一九四八年という土壌に書かれたものである。

※「Xへの献辞」と「現代詩とは何か」の間にある微妙なタイムラグ。しかしそれを打ち消す『荒地詩集1951』への同時掲載。それぞれの持っていた文脈を消去し、「共同なるものへ、〈荒地的なもの〉へ」と働くふたつのエッセイ。

＊同時代における『荒地詩集1951』の読まれ方

《資料18》鮎川信夫・中桐雅夫・黒田三郎・三好豊一郎・北村太郎・木原孝一「「荒地」の意図と成果」

鮎川　強気で三千部つくったが、木原は五百以上は絶対ダメだっていっていた。木原は自分で詩の雑誌をやってたから常識があったわけだ。でも共同に聞いたら、五百部も三千部も大して値段が変らないって言うんだよ。

三好　九割何分か、売っちゃったね。

※一部の資料では「三〇〇〇部を売り切った」とされているが、出典は不明。

《資料19》中桐雅夫「「荒地詩集」批判に答へる」

われわれが「荒地詩集」を刊行したとき、われわれは起るべき当然の共感と非難とを予期してゐたが、党派的偏見や悪意に発した批判にはもちろん、すべての批判に対して、一切答へないことにしよう、とわれわれは考へてゐた。ところが、種々の雑誌で「荒地詩集」がとりあげられ、様々に論じられてゐるのを読んだ人々から、どうしてそれらに反駁をしないのか、といふ手紙が多数われわれの手許に届けられ、なかには、率直に疑問を述べて説明を求めるものもあつた。

《資料20》『荒地詩集1952』表4「第一集に対する反響」（引用は『荒地詩集1954』新装版月報より）

●『荒地』の詩は在来の日本の文章法に抵抗し、それに反逆しなければ在り得ないところの「言語の革命」の結果である。こうして新しい詩法が、はからずもここにひとつ達成されているのだ。（『詩学』長江道太郎氏評）

●詩人は近代において、長年のあいだ誇ってきた、時代の良心であり先駆者である位置を全く散文家によって取って代られ、詩は第二芸術の地位に転落してしまったと云われる。もし詩が再生しうるとすれば、人間性と時代とが根本から再検されなければならぬ現在の荒廃の時期をおいてはないと思われるが、『荒地』の詩人たちがここで根本的に正しい出発をしていることは疑うことができない。この人たちの運動の成否に、確かに現代詩の運命はかかっていると云えるであろう。（『近代文学』山室静氏評）

●全体として実験的詩法の中に戦争の傷痕がなまなましく脈うっている。反戦的な人間観をそれぞれの方法で表現することで、これらの詩人が戦後の新しい詩風を開いていることが感じられる。（『毎日新聞』伊藤整氏評）

●危機意識の中に詩の現代的主題を追求展開せんとするその方法の今後には期待されるものがある。（読売新聞評）

●コミュニズム批判の立場が明確に打ち出されており、青年詩人たちの最近の動向が見られる。（東京新聞評）

●戦後の詩の代表的な運動は何か、また代表的な詩集は何かと云えば、その第一のものとして、少くとも一つとして、この『荒地詩集』を推さない人は、詩を語る人の中にいないだろうと思う。（中略）ここに集る人たちは、現代の詩人中、もっとも切実な現実感を詩によって歌おうとする。それは現代の最も切実な問題を正視し、それから逃げずに、深く突っ込んで考えようとする態度を意味する。『荒地』の人々はこの点において思想的ならんとし、殊に観念的、或いは形市上的であろうとする。しかも足は決して大地と現実から離れていないのである。（『新潟日報』吉田精一氏評）

●日本の詩の新しい可能を予見するものとして、戦後の最も重要なアンソロジイの一つであることはいうまでもない。（『読売新聞』池田克己氏評）

●何のために詩を書くか。何のために生きるか。人間とは何物か。これらの問いは古くして新しい問いである。死んだ言葉のみ枯葉の如く無数に舞い踊る現実の荒地に於ては言葉の意味が真剣に問われない。肉体は肉体の意味を問うことすら忘れてしまっている。その時に於て言葉の意味の戸はマクベスの戸の如く『荒地』の詩精神によってたたかれている。その音は現代の闇の中に魔の如く聞える。（『詩学』木下常太郎氏評）

※この項、調査不十分。継続調査の予定。

■内容の要約

○Ⅰ　詩人の条件

サンボリズムの「純粋詩」においては、詩人と社会の関係はまったく無視されており、芸術至上

主義的だった。現代に生きるわれわれは、このような詩の概念を否定しなければならない。われわれの日常生活は、詩よりも詩でないもののうちに多く生きている。その間に生きている人間は、詩でないものに駆り立てられ、詩を自己確認の場とする。／現在の生活の実感を忘れているからこそ、それぞれの主義主張が不当にみずからの存在を強調している現代詩の混乱状態があるのだ。／われわれが詩を書くのは、生活を見失くないからである。その生活には欧米のような共通理念としての「文明」は存在していなかった。その後、戦争という共同体験によって現代の荒地という共通の主題を持ったが、依然として不安の意識は去らない。その結果、われわれはわれわれを救うものを求めて、未経験の文明の幻影を夢みる。幻影を抱くこと、ヨーロッパの文明を思い描くことが、われわれの生活である。その現実の生活を言葉に射影することで、われわれの詩は成り立つ。荒地に対する愛とは、現代そのものに対する愛であり、われわれを救う永続的価値をみいだそうとする詩人の態度である。詩人は、現代人の絶望や苦悩の下に潜んでいる無名にして共同の世界、互いに連帯して進み得るような源泉的感情の基礎をみいだすことができる。そこから生の方向と生の中心とを有償的に求めていこうとするのが、詩人の態度だ。／詩を書く自意識には、社会に対するわれわれの責任が問われなければならない。そのためには、われわれのための倫理を社会的に展開、確立し、自分自身に誠実である必要がある。いわば、われわれは「詩を書く」ことによって現代に誠実なのである。われわれは空虚を抱きながらも、沈黙すべきでないのだ。

※詩を書くことの意味が問われた文章。批判対象となっているのはサンボリズム、なかでもヴァレリーの「純粋詩」の概念。サンボリズムにおいては詩が社会や生活と離れていたが、それではいけないという考えが述べられている。現代の荒地において、詩を書くとは生を発見することであり、そのためには生活の実感を忘れてはならないとする。また、書く際にはたしかな倫理観に裏打ちされた社会的責任に対する自覚が必要である、とされている。現実と乖離したモダニズムに対する批判的な眼差しが全体を貫いている。【キーワード】詩と詩でないもの、自己確認、文明、永続的価値、生の中心、無償性・有償性

《資料21》三好豊一郎「編集ノート」（『鮎川信夫著作集』第二巻、一九七三年一一月。引用は「鮎川信夫全集月報Ⅴ」より）

「Ⅰ・詩人の条件」は、フランスのサンボリスム及びそこから発する近代詩のさまざまな流派、その影響下にある詩の概念を打破する必要を説く。そこでは詩人の自我は作品＝製作者の責任において書く、という詩作行為の認識を持つだけであって、詩人と社会との関係、詩作行為の倫理的意味を持つということは、あくまで詩人の主体的な自我にかかわる問題であって、政治的な行為とか社会的集団的思想に組することではない。効用面からみた詩の社会性などは殆ど問題にならない。当時のコミュニストにはこの点が全くわからなかったと言っていい。

○Ⅱ　幻滅について

僕たちの詩が暗く、幻滅的であるのは、僕たちの歴史や生活が暗く、いつも幻滅的だったということである。しかし、その幻滅を踏み越えることで、新しい真理と信念に到達するという確信は持ち続けてきた。それは、僕たちが第一次大戦後のヨーロッパ文学の影響を強く受けているからである。その影響のために僕たちは戦前よりすでに戦後的であり、幻滅的だったが、当時の幻滅的な感情はダダやシュルレアリスムによって刺激を与えられていた。それを現実の生に対する源泉的感情を持たない、芸術上のモダニズムとしてのみ受け入れたのが、春山行夫ら戦前のモダニストたちである。戦後、精神的状況がより危機的、幻滅的になったために、それらには魅力が感じられなくなった。モダニズムの詩は態度より技術へと展開し、詩の技術の独立を望んだが、今日の詩は技術より態度へと進んでいる。それは、詩人と社会との関係が問題になってきたからである。中桐雅夫「終末」は、現代における幻滅的なものを経験全体として想像的に把握し、現代の暗黒をあらわにしてみせた。多くの人がこうした暗い現実から逃れたいと思っており、その願いは新しい時代のつるはしの一打となる。ただし、救いは人間の目的や価値が変わらない限り、やすやすとはやってこないだろう。それは、イデオロギー論争を持ち出す人々がいっているような戦争の犠牲や政治的、社会的な諸問題から僕たちの暗さが突如として出現しているわけではないからだ。黒田三郎「死の中に」に示されているように、僕たちの日常生活には死の観念が幻影として忍び込んでいる。そのような幻滅的な現代の生の現実を直視し、そこに隠れた感情を流出せしめるのが僕等の詩だ。ただし、僕等の詩はある意味で有罪観念の逃避所にすぎず、敗北的である。それでもなお、僕たちのなかには幻滅について語りうるまだ書かれていない言葉がある気がしてならない。

※現代詩の暗さが、自分たちの生活や歴史の暗

さに由来していることを主張したもの。そのなかで批判されているのが（自分たちの出自でもある）戦前のモダニズムで、社会との関係の希薄さが問題にされている。しかし、詩人と社会との関係を重要視しているからといって、コミュニスティックな立場からそのような発言を行っているのではない。ここで問題にされているのは、（戦争によってもたらされた死の）観念である。しかし、現代における幻滅的なものを解消する術は今の自分たちにはない。それが鮎川のいう「詩人の敗北性」なのではないだろうか。【キーワード】幻滅的、戦前においてすでに戦後的、モダニズム、態度より技術へ・技術より態度へ、死の観念、敗北性

《資料22》三好豊一郎「編集ノート」

「Ⅱ・幻滅について」は、モダニズムの技術主義を批判し、主題の必要性を説くが、それは詩の機能や効用を「如何に現在に生かしてゆくかという歴史的意識」にもとづくもので、一時的に現代を反映することではない。われわれの経験全体を、過去、現在、未来にわたる文明のなかに、いかに位置づけ、想像的に把握してゆくか、という認識が当然要求するものである。「荒地」の詩の暗いムード、シニシズム、懐疑、幻滅感は、現代の物質文明を救いなしと見るところからくる。感傷のヴェールでは勿論ない。楽天的な粉飾をはぎとり現代の生を直視するところからくるのである、徹底的に幻滅することから光を発見する――それが「荒地」における詩作の意味であった。

○Ⅲ　祖国なき精神

二年ぐらい前から、ふたたび愛国心という言葉を聞くようになってきた。そのことで僕が恐れるのは、出口のない自己奴隷的な日本的精神風土へ逆行しないかということである。もし逆行すれば、世界に向かって閉ざされてしまうことになってしまう。日本には愛国心は好い物という低い意識がいまだに現存している。しかし、それでは何のために戦争に敗けたかわからなくなりかねない。愛国心が猛威を振るっているからといって、色目を使う必要も恐れる必要もない。日本は一度すべてを焼き払うべきだ。少なくともわれわれの詩を書く出発点は、そういうところでなくてはならない。あらゆる鎖を断ち切ったとき、われわれはどこへでも歩いていける。「なすべき何事も持たず」とは、なすべき何事かを発見するに足る能力を持っているということであり、そのような能力の持ち主こそ詩人なのだ。詩人はむしろやすやすと祖国をあとにする存在なのである。／戦争中、僕たちは何もしなかった。しかし戦争や徴兵制度はわれわれに激しい精神的影響を及ぼした。われわれの世代が、あらゆる外的な事柄を強制されたものとして受け取り、その課題に耐え、自らの可能性を葬ってきたのは、その影響のせいである。戦争中、われわれはわれわれの行為に立ち会っていなかった。それが、戦争中におけるわれわれ自身の行為のすべてである。日本人である限り、すべての人の行為は自分の顔をした他人のそれであったのだ。かといって、戦争に関してすべての日本人が同罪だったわけではなく、むしろ逆である。にもかかわらず、戦犯たちの死刑が意味ありげに語られるこの国は、文明国とみなされる資格はない。第二次大戦とは、まさに近代日本の異端文化に対して世界の文明からくだされた審判であった。その結果、日本において伝統と考えられていたものはすべて封建的な遺制に過ぎないことが明らかとなった。僕たちは戦争中、日本の伝統といわれていたまやかしに反発したが、その精神の叫びによって祖国は失われたのである。しかし詩人は、言葉を失っていない。それは、何も失っていないということだ。詩人は言葉のなかにしか祖国を見出さないのである。日本語は不完全なものであり、いまだに近代に達していない。しかしながら、今日、すぐれた現代詩が若い世代によって書かれつつある。やがてこの世代が三〇代、四〇代に達したころ、真に成熟した詩が真の文明と結ばれていることを見出すだろう。

※愛国心なるものに対する世代的な感情が述べられている。愛国心なんてものは戦争中にも持っていなかったし、今も持つ必要がない。そういうものを持たないからこそ、詩人は言葉のなかに「なすべき何事か」を発見できる、ということが主張されている。若い詩人たちの未来をかなりロマンティックに捉えているように感じられるが、このような希望が「現代の荒地」において必要だったということだろうか。あるいは若さゆえか。【キーワード】愛国心、祖国、伝統、文明

《資料23》三好豊一郎「編集ノート」

「Ⅲ・祖国なき精神」は、詩人がご都合主義や便宜主義の思想態度で苦しまぎれに現実を糊塗してはならないと説く。確固たる態度を持するとは、頑迷な悶執ではないし、個人的な、一時的な確信とか信念ではもちろんない。文明の伝統に支えられた精神に基づくべきだが、われわれの文化は伝統のカを持っていない。伝統とされるものも「封建的な遺訓」「因習の心理的固定化」にすぎない。とはいえわれわれは日本語で詩を書きながら、精神的に異なった文明を経験してきたのであり、そ

れは困難だが新しい可能性を暗示するものだ、と彼は言う。彼は、ヨーロッパのキリスト教的文明を正しい伝統と見る。

「僕たちが戦争中日本の伝統といわれたまやかしものに対して反撥した感情は、今日では逆に正しい文明の伝統を求めようとする気持を、一種のロマンティシズムの形で支える源泉的な感情になっている。それは僕たちのあらゆる仕事の原動力といえるものである」。たしかにそうであったし、この点での何らのより積極的な成果が持続して見られるべきであった。「荒地」の文学運動としての意味をここに見たいので、私はその不徹底と挫折の原因を考えるのであるが、その一つは、日本をともかくもラツキョーの皮をむくようにでも徹底追究しなかったこと（――日本は日本人にとって決して自明ではない）、その二は、異質の文明を異質の言葉で経験することの限界性（――文明とか伝統とかは、単に言葉の問題でなく、生活風俗習慣の歴史的経過のすべてにかかわるものである）――その前で窮したのだ。

文学運動としての「荒地」が、モダニズム批判などという玄関口にとどまって、母家にまで踏みこめなかったゆえんである。

「この世代が、三十代、四十代に達した頃、われわれは真に成熟した詩が、真の文明に結ばれていることを見出すだろう」。

「われわれは時代の歴史の審判によって、古い祖国を失った。敗戦という事実の架空なからくりによって失ったのではなく、われわれの精神の真実な叫びによって、祖国は失われたのである」。

鮎川でなければ発せられぬ言葉だ。彼こそ「荒地」の夢の九十パーセントの所有者であったのだ。

○Ⅳ　なぜ詩を書くか

詩を玩具やゲームとみたり、自己表現の道具とみなすことを僕たちが不快に思う最大の理由は、現代においてわれわれの存在が絶えず不安にさらされていることを認識していないからである。現代の荒地において、精神的自由や物質的なパンを保証してくれるものはない。そういう不安な危機的様相のなかに詩人自身が生きており、そのなかから生活の前途を見出そうとしているのが詩人なのだ。むしろ、危機そのものを確認するために詩人は詩を書くのであり、「詩を書く」ことでわれわれは初めて危機にぶつかる。その見えざるものを可視化し、証明するとき、詩は生きてくる。とすれば、政治的社会的不安の根本にはいかなる力が隠れているか、その諸悪がわれわれの内部にいかに忍び寄ってくるかを、詩に射影しなければならない。詩人は好むと好まざるとにかかわらず預言者の役目を負わざるをえないのである。／戦後の絶望や虚無を知識階級やジャーナリズムがいくら取り上げても、崩れゆく世界の内部状況は何等解決しない。絶望の根源である内部状況を書くことができるのは、詩だけだ。死に至らんとする世紀病をえぐりとることで、「詩を書く」という特権的状態は生活的意味を持つことになる。なぜ詩を書くか。それは、僕たちの精神が現代の危機の意識を離れられず、詩を書くことはその精神の救いとなるからだ。こうした僕の考えは、進歩主義者や唯物論者には観念論の神秘化にしかみえないかもしれない。しかし、進歩的文明が魂の問題を解決したか。唯物論的世界観が内的自由すら奪いかねない全体主義に転化しないと誰が保証できるか。詩はわれわれの魂の問題の所在を明らかにする。／われわれが詩を書くのは、本源的な魂の問題を明らかにしたいという希求からである。それは、詩でなくてもわれわれを捉えている精神的欲望であり、究極的には宗教的精神と似た祈りの状態を憧憬する。しかし、近代とは神を認めようとしない実証主義と無神論が跳梁した時代であり、その時代に人間は堕落し、魂の自由を失っていった。そうした近代に対する反省が現代のひとつの課題であり、現代においてふたたび詩人を悲惨の証人にしたいというのが僕の希望である。詩を書くことと現代的であることとは矛盾しない。また、詩は「現在」のみによって必ずしも成立しない。だからこそわれわれは、過去の罪や過失を贖ったり栄光や価値を継承したりできるし、「未来は過去の中に含まれる」ということができる。現代の精神的危機のなか、人々の魂の声となるように詩人はどうわれわれの詩を成長させていかなければならないか。それが今後の課題である。／なぜ詩を書くか、という問いに対する僕の答えは、みずからのあやふやな存在のなかに、外から明らかな光を見出すこと、光を収斂して一つの中心を見出すことである。この考えは、多分に宗教的精神と結びついているかもしれない。しかし、僕は宗教と詩を同一視してはいない。どちらも、もう一方の代用品ではないのである。僕の考えがドグマティックであるのは、僕はモダニズムの悪い影響で現代の詩人にドグマが少ないことに不満があるからだ。また、僕たちのカトリシズムへの関心を「荒地」批判の材料とする人々がいるが、カトリシズムが何であるか論者に分かっていない限り、その批判は成り立たない。「荒地」にはさまざまな批判があるが、その人達は「現代は荒地である」という思想の「荒地」を象徴的な言葉としてしか捉えておらず、われわれの仕事の基準が分からないからかもしれない。その批判のひとつに「戦前はファシ

ズムに、戦後はコミュニズムに抵抗を感ずる」という僕たちの主張における抵抗の実体がはっきりしない、というのがある。しかし、抵抗の実体がはっきりしないことについては、「荒地」のエコールの生死を賭けた答えがある。戦争中のファシズムに対する抵抗が真実であれば、ファシズムそのものの理解にも苦悩と認識の体験をもっているはずである。批判するにしても、気軽にファシズム批判ができるわけがない。その批判は、日本の伝統の問題へと肉薄していく。とすれば、抵抗の実体は、日本の伝統という問題に対する僕たちの未来の問題として明示されるしかないだろう。

※「現代詩とは何か」の中心的な部分。「なぜ詩を書くか」ということを、現代という時代のなかから捉えようとしている。まず前提となるのは、現代が「不安」の時代にあるという考え方。人々は不安におびやかされ、危機的状況にある。それを可視化するのが詩人の役目である。その「不安」とは社会的・政治的・経済的には解決されない精神的・観念的な問題で、それを明るみに出し、解決できるのはただ詩のみだというわけではないが、詩がその一端を担っていることは間違いない、そこにこそ詩の現代性がある、ということが主張されている。社会科学のみが「現代」の問題を扱っているという社会的認識が当時の雰囲気にはあり、それに対する人文科学側からの反撥のようにみえなくもない。最後の節のほとんどが「荒地」に対する批判への反批判に費やされていることは、この時期すでに「荒地」が大きな「エコール」としてみられていたことを示しているだろう。ファシズムへのスタンスの問題は、次の「詩と伝統」の章と合わせ読む必要があると思われる。「荒地」におけるカトリシズムへの関心など、ほかにも考えなければならないことは多い。【キーワード】詩を書く、危機の意識、魂の問題、一つの中心、カトリシズム、ファシズム

《資料24》三好豊一郎「編集ノート」

「Ⅳ・なぜ詩を書くか」。詩は高級な遊びでも単なる自己表現の具でもなく、現代の精神の危機の体験的認識にかかわるところにこそ成り立つもので、詩の声とは魂の声である。「魂」という言葉は、人間の普遍の問題、即ち宗教への志向をはらむ。宗教は人間を魂において救済するもので、生活の表面において救済するものではない。詩もまた、その点にかかわることで意義を持つもので、もしそうでなかったら精神の遊戯、自己慰撫の具にすぎない。「『詩を書く』という創造的仕事によって、われわれは始めて危機にぶつかるのである」。「それ故にこそ現代の暗黒を――救いなき精神の危機を可観的にわれわれの身辺の現実の中に描き出すことが必要なのである」「僕はいささか大時代ではあるが、現代の詩人を人間の悲惨の証人という位置に立たしめたいのである」。「すべての時を〈現在〉に置きかえることによってしか、時というものを見分けようとしない人達は、結局現在すらも見分ける能力を持たぬ者である」。「われわれの荒地的世界を灰色に彩る帥きと悲しみと嘆きは、決して眼に見える病的徴候の政治的、社会的、経済的外科手術によってのみ、解決されるものではないのである。むしろ外科的手術によって解決できると盲信する藪医者どものために、現代は半死半生の病人となっている」。

以上の彼の言葉が現在もまだ（ーーより以上に）生きた響きを発するところに、「荒地」の文学運動の土台があり、この土台が無用どころか、より強固にせねばならぬところに、文学運動としての「荒地」の意義はまだ生きているといえる。つまり文学運動としての「荒地」は終ってはいないのである。

○Ⅴ　詩と伝統

一般に、詩は伝統を打破するものと思われているが、そのためにはまず打破される伝統がはっきりと認識されていなければならない。新しい詩の価値が定めにくいのは、詩の批評の公的基準が定め難いからであり、伝統が欠如しているからである。伝統がないと、伝統を破ることはできない。前世代への反動と脱出の連続で、文化的にはほとんど貢献してこなかったのが、日本の近代詩の歴史だ。／詩の伝統には、西欧的なものと、日本的なものを含む伝統の二種類がある。しかし、その二つの伝統は、詩人の意識のなかにおいて不完全なかたちでしか存在せず、詩の発展にはあまり役立っていないようだ。ヨーロッパ人でないわれわれには、真の意味でその伝統は理解できない。また、さまざまな困難を克服して、西欧的伝統のなかからひとつの永続的価値を移植し得たとしても、国語というさらに大きな障碍がある。一方、日本的伝統は、一般の文学的表現のなかに強く生き残っている。だが、それを支えてきたところのさまざまな制度や習慣が欧米文明の影響によって激しく変化しつつある今、それでいいとはいえない。以上の結果、現代詩は無伝統的であり、次から次へと新しいものが生まれ、消えていく。伝統がないとは、価値がないということだ。／優秀な文化的所産は、複雑化し、変化を積み重ねて、全体的経験を形作る。その全体的経験とは、人間にとって不滅の証明だ。そして、一篇の詩の経験は、大

きな全体の体験とひとつになることで、人々の胸に残ることになるのである。ほとんどすべての現代の詩人は、不滅など空虚で観念的幻想だと考えているが、しかし少しでも自分の作品を永続させようという努力をみていると、不滅を拒絶しているとは思われない。不滅とは伝統がない限り触れることができないものであり、伝統とは個人や手段の意志によっては樹立することのできないものだ。そこには二つの伝統があるばかりで、両者の組み合わせから生じる第三の立場はない。しかし、どちらの伝統も現代の詩人に充分な働きをするとは思われない。この困難な問題を解決しない限り、現代詩は文化の領域をは売れた不毛地帯を彷徨うしかないだろう。われわれにとって役立ちうる永続的価値をわれわれ自身の現代意識から見出すには、どうしても不滅となったダンテやシェークスピアを知る必要があると思われる。／人間の意識を不死なる文化につなぐものは、人間の個体の死にほかならない。つなり、文化と伝統と死は相関関係にある。今日、ある種の伝統主義者は、日本人は伝統の上に死なざるを得ず、芸術家は日本文化の上にその名をとどめざるを得ない、と考えている。しかし、われわれは民族的、国家的伝統と呼ばれるものが意識の上で演じるからくりを知っている。また、真の伝統とは、未来から現在、そして過去へと貫いているものでなくてはならない。それこそが永続的価値というものである。現在において、未来の文明のふたつの有力な仮説は唯物論的なものとキリスト教的なものである。もちろん、それらとは異なる未来の文明が待っているかもしれない。しかし、未来は決して世界の過去から切り離されない。その世界の未来から一条の光を掴み取ることができれば、われわれに困難を感じさせている伝統の問題も解決するだろう。

※伝統というものがないなかで、日本の近代詩は展開されてきた。その結果、文化的な貢献がほとんどなかったのが近代詩である。また、伝統には西欧的な伝統と日本的な伝統の二つしかないが、詩人の意識には不完全なかたちでしか存在せず、その結果、現代詩は無価値なバブル状態に陥っている、ということが主張されている。では、その状態を脱却し、永続的価値を獲得するにはどうすればよいか。そのためには、すでに不滅となった過去を知り、現在の唯物論的仮説とキリスト教的仮説をふまえて、未来まで貫くものを探る必要がある。そこから光を掴み取ることができれば、伝統が見出され、現代詩の価値も生じるだろう、というのが一応の結論のようである。ただし、この章の最後でいわれているように「僕がここで一つの結論を述べたとしても、それが結論と共に終わらない」問題であり、光を掴み取ることは困難だ。それでも、希望を失ってはいけない、ということなのだろうか。伝統がないことについての近代詩人たちの困難を考えれば、その困難こそ日本的な伝統といえるのかもしれない。「現在に於て、未来の文明に関する二つの有力な仮説が存在する。唯物論的仮説とキリスト教的仮説である」という理解も気にかかる。【キーワード】伝統（西欧的伝統・日本的伝統）、詩の価値、欧米文明、文化的所産、不滅、永続的価値、日本文化、未来

《資料25》三好豊一郎「編集ノート」

「V・詩と伝統」は「荒地」の運動の本屋に当る。近代詩が「幾多の変遷を経てきたにもかかわらず、単に前世代への反動と脱出の連続」にすぎず、「詩の批評の公的基準が定め難い」のは、「真の伝統の欠除」による。つまり「反復のうちにまだ新しい生産力、推進力を充分に持っているところの歴史的要素としての伝統」それがないからである、と指摘する。われわれが真剣に伝統について考えるとき、儒教的仏教的影響によって現在までに至った日本的伝統、明治以来それを根本的にゆるがしつづけてきた西欧的伝統の二つが思い浮かぶ。そして第三の立場という便利なものがないからには、われわれのよって立つ根拠というものは当然薄弱である。なぜならわれわれは日本的伝統にもとづいて詩を書いているわけではないし、かといって西欧的伝統は観念的に考えうるだけで、そこに立脚できるわけではないからである。しかも、われわれは一時のひまつぶしに詩を書いているわけではない。文化の永続的価値を発見しようとして書いているのだ。永続的価値は単に過去の文化遺産から発見するのではなく、「現代に生きるわれわれ自身の中」から発見しなくてはならない。実にそのためにこそ、「文化遺産」は意味があるのだ――すなわち、現在を照射する光源として、われわれに意義ある知識を与えるものである。だが、その光源が未来からくる光に照応しないならば、単なる「文化遺産」であって、伝統を形成する力とはなりえない。われわれが詩を書くことの意味は、この未来からの光を感得する一つの手段であるのだが、われわれはようやく、そのことの認識に到ったばかりである。

「未来からの光」といってもそれは意識の問題であるから、比喩的にしか諳りえない。このとき鮎川の意識のなかにはT・S・エリオットの「四つの四重奏」のとりわけ冒頭の数行がひらめいていたことは明らかである。「未来は世界の過去に含ま

れる、ということを忘れてはならない。未来は決して日本の、ではなく世界の過去から切離されぬ。そして未来は現在及び過を審判し多くの収穫のなかから毒麦をよりわけるであろう」。日本の未来はどうして日本の過去からではなく、世界の過去から切り離せないのか。それは日本人が日本を見る視点の、世界的拡大を意味するもので、戦前の病的な日本主義者は逆に、世界の未来を日本の過去に含ませようと、強引な茶番劇を企てたのだといえば、彼の言辞ははっきり理解されるであろう。

○Ⅵ　詩への希望

詩の価値とは、その詩が人間の経験に訴えて、人間の知性ならびに感性に及ぼす効果によって決まる。一篇の詩から受け取った感動を他人に伝えるのは難しいが、その価値を証明しようとすれば、結局のところ経験や判断に頼るしかない。したがって、詩の価値を証明しようと思うならば、われわれは生に対する明確な目的と善悪の意識を持ち、生きた経験と判断に重きを置いて、自分の立場に自信を持つべきだろう。そのためには、詩的なものが立派な役割を持っていることをまずは認める必要がある。科学合理主義は、詩や宗教を時代遅れなものとして退けてきた。自信も信念もない詩人たちはそのことを受け入れ、文学の片隅でかろうじて生き延びてきた。しかし、懐疑や絶望や不信のはびこる現代において、詩を心の糧としている人々がいる。そのような人たちがいる限り、詩人が無力であってはいけないし、詩の価値を証明するのに外的権威や機械的方法に頼っていてもいけない。／詩の隠喩や寓意は、外部感覚を表現するには曖昧だが、内的感覚、精神的実在について伝達するのに適している。われわれの経験には、それによってしか表現し得ないような情緒が存在している。北村太郎の「雨」は、詩的表現とわれわれの経験との密接な関係を示した一例であり、隠喩と寓意との結合によって観念と情緒を微妙に融合させた好例である。このような調和を生み出すとき、詩は創造的であるといわれる。その調和にはさまざまな種類があるが、可視的なものと不可視的なものを意識的に結びつけることも一つの調和となる。詩の調和は、人間の知性と感受性に何らかの新しい生命的感化を与えるものなくてはならない。このような言語活動を通じて、われわれは自らの生命の在り方を考えていく。そのときわれわれは自分の置かれた環境、文化、生活に対して特殊な反抗の仕方をしているが、いかに抵抗するにしても現実に存在しない架空のシチュエーションに立つわけにはいかない。われわれの日本語の新しい可能性も、経験のなかで成長する。もしそこから外れたら、僕たちの詩の可能性はたちまち不可能性に陥ってしまうだろう。／第二次大戦の結果、われわれは個人の自由が認められた。しかし、現代においては重苦しい不安と絶望ばかりがあり、われわれの自由は破滅に通じている。われわれは自由であるとともに、破滅しうる人間であるのだ。そこから、われわれは自己の生活の第一歩を踏み出す。北村太郎は「雨」において、「われわれの腸に死は流れる」という実存の問題に突き当たったが、「センチメンタル・ジャアニイ」においては「死者の棲む大いなる境」をみつめている。ここにあるのは、生に執着することに何の希望も抱かず、生に死を呼び込むことで救われるという思想だ。問われなければならないのは、「現在」を大いなる境に近づきつつある一歩一歩の瞬間として感じ、いつどこにあるか分からない終わりのときまで重たい靴を運んでいく、そうした「私」の思想と情緒の現実性であり、将来や死後に救われるかどうかはどうでもよいことである。言葉を用いて現実の破滅的要素を消滅させることなど、詩人にはもちろん、現実的にもできない。詩が願うのは、罪人であるわれわれの惨めな「現在」を救済せしめんとすることだけである。人々を惨めな心理状態から救うような詩、温厚で豊かな感情を与えるような詩、卑屈で怯懦な気持ちを高い精神的勇気に駆り立てるような詩。そうしたひとびとにとって真の慰めとなるような詩こそ、われわれの目的なのである。

※詩の価値について論じたもの。詩の価値は人間の感性に及ぼす効果によって決まる。その価値をないがしろにしてきたのが近代科学合理主義であり、詩人たちも詩の意味を見失っていた。その効果は、人間に何らかの新しい生命的感化を与えるものでなくてはならない。詩のレトリックは人間の内的感覚、精神的実在を表現することに適している。現代の破滅的要素を消滅させることは詩にはできないが、不安や絶望のなかで生きているわれわれの現在を救済しようとするのが詩である。そのような真の慰めを詩は目指さなくてはならない、ということが主張されている。科学合理主義に対する詩や宗教の立場を念頭に置いて書かれており、読む際にもそのことに注意すべきであると思われる。不安や絶望に駆られているわれわれに生きる意味を与えるのが詩であるという発想は、そのまま現在にも通用しそうだ。ここで問われているのは、わたしたちの生の有り様なのだろう。「何事かを為す場合、われわれはわれわれの全存在を賭けるより仕方がない」という言葉が、重く響く。【キーワ

ード】詩の価値、科学合理主義、隠喩・寓意、情緒、経験、自由、破滅、現在

《資料26》三好豊一郎「編集ノート」

「Ⅵ・詩への希望」は「人類の文化的所産といわれるもののうち、詩ほど顚落し」「空疎な娯楽」にひとしくなってしまったものがあろうかと問う。一つには近代の科学的合理主義や唯物思想が、精神的価値を物的条件や外的環境に附随するもの、あるいはその反映としか見ないための、詩人の自信喪失にもよるが、詩が人間の深い源泉的感情に根ざしたものであるという自覚が詩人自身に失なわれたからでもある。日本の詩の新しい可能性は、この源泉的感情の回復にかかる。この回復は、言葉と経験の相関性を深めること以外にない。それは言葉の意味を深めることであり、意識の見えない深部での働きを言葉によって捉えることである。詩の表現技法としての隠喩や寓意は、言語様式それ自体に含まれる「外界についての認識のみならず、内的感覚、精神的実在についての認識をも伝達する」働きにかかわるものであり、「われわれの経験には、隠喩や寓意の持続的な成長力によってしか表現しえぬような深い情緒というものがある」からである。この深い情緒は、常に「現在の時」にしばられているせまい人間の意識を、未来と過去に向かって解放する。ただし観念的思弁的に現在を捨象することではない。「破滅的感覚」をまず詩人は持つこと、そして現在の生活事象を侵している現代文明の破滅的要素にひたることで、現実の不安と幻滅を徹底的に経験すること。それは「われわれが自由であると同時に、破滅しうる人間である」ことの認識を持つことである。この認識は絶望へ導くものではなく、絶望的な状況の中で生きる存在者の渇きに導くのだ。これを実感しない人々は「現在の時」から解放されたいとは思わぬであろう。詩人の使命は、現代の破滅的要素を消滅させるべき実際的効用を説くことではなく、精神的価値の世界を発見することによって「現在」を永遠の中へと救出することにある。

以上の要約からみてもわかるように、鮎川はここで著るしく宗教に接近しているかに見えるが、それはあくまで、詩を個人の恋意の問題としてではなく、本質的に文明の問題として考えるからである。

■問題点の検討

＊「現代詩とは何か」が生み出された背景

【本文5】「Ⅰ　詩人の条件」→【本文4】

《資料27》小海永二「戦後日本の詩運動」（『近代詩から現代詩へ』有精堂出版、一九六六年四月）

ここには、彼らが戦争体験を返して得たものと、またその体験を経た戦後の時点で彼らが目ざそうとしたものが何であったかが、かなりはっきりと語られている。そして、彼らのこうした詩的態度は、敗戦直後に似た解放感からようやくさめて自分たちのおかれた状況を自覚し、ふたたびめぐりくる戦争の危機を感じ始めた若い世代に、強い共感を以て迎えられた。月刊「荒地」の創刊された一九四七年以降、アンソロジー『荒地詩集第一集』の出された一九五一年に五るまでの五年間には、日本の戦後の歴史の上で象徴的ないくつかの事件が相次いで起っている。いわく、二・一ゼネスト中止令（一九円七年）、三鷹・松川・下山事件（一九四九年）、朝鮮戦争勃発（一九五〇年）、日米安保条約調印（一九五一年）……さらにその翌年の一九五二年には水爆実験成功というニュースが伝わった。こうした社会的背景を考える時、「荒地」の受け入れられる土壌はあったという言い方もできよう。

※「現代詩とは何か」には「戦前に於てすでに戦後的であつた」とは書かれているが、「戦後に於てもはや戦前である」とは書かれていない。

【本文6】「Ⅱ　幻滅について」

第一次と第二次という二つの戦後、――僕たちの戦後感覚は、単に第二次大戦後に根ざすものではない。僕たちの詩人としての精神は、第一次大戦後絶えず分裂と破壊を繰返してきた世界史の、幻滅的な先端である現代意識に於て成長してきたからである。

僕たちが戦前に於てすでに戦後的であつたということは、第一次大戦後のヨーロッパ文学の影響によるのである。ダダやシユルレアリスムが、当時の幻滅的な環境に新鮮な刺激を与えたことも確かである。

《資料28》北川透「〈荒地〉の文明批評的性格をめぐって」

彼らの〈荒地〉の観念とは、第一義的には、第一次大戦後のヨーロッパの戦後意識なのである。それを単に、彼らの知識や教養に過ぎないとみては、問題の所在を見失うだろう。なぜなら、彼らは荒地の幻影を抱くことで、あるいはそのヨーロッパの戦後意識を実感することで、ほかならぬ戦争に耐えてきたからである。もっといえば、戦争詩や愛国詩を絶対に書かない詩精神を組み立てである。そうであれば、『荒地詩集』一九五一年版の加島祥造の論文が《「荒地」の思想は、「破滅的要素」の実感は、今の僕達に、嘗ての知性的な同感としてではなく、生活と血肉の経験としてある。》（「破滅的要素」）と述べていることは、途方もないことであるが、それはやはり彼らの共通の実感

であったにちがいない。
※果たして、「ふたたびめぐりくる戦争の危機」
というような実感が、鮎川にあったか。

＊鮎川が描こうとしたもの

《資料29》菅谷規矩雄「論理のエロスをもとめて　戦後詩論概観」（『現代詩読本特装版　現代詩の展望――戦後詩再読』思潮社、一九八六年一一月）

《現代詩とは何か》は、初期戦後詩の理論的総決算という位置を占めている。その主題は一貫して、現代詩の正当性（オーセンティシティ）はどこにあるか――を証明することにあった。（中略）

フランスの近代詩とりわけサンボリスムの摂取・消化という課題の具現は、戦前の日本では、大正末ころまでの金子光晴の詩作にとどめをさし、そしてその水準のままにとどまっていた。そのあとにランボオ、マラルメ、そしてシュルレアリスム……と、フランス詩の動向は、わが国では、もっぱら、追随すべき流行――モードでありファッションであるだけだった。そのあげくは、シュルレアリスムを、政治（左翼イデオロギイ）と文学（詩）の結合という不毛な実験（?!）の道具として利用するにいたった。これが一九五〇年代のすがたである。

T・S・エリオットに依拠することは、どんな意味を持ってたか――《荒地》（The Waste Land）をひとつのピークとするエリオットの詩作は、それじたいフランス象徴派を前提として可能になった。（中略）わが現代詩は、T・S・エリオット（をはじめとするイギリス詩）を介してようやく、サンボリスムの現代的摂取を、みずからの詩作に具現するみちをみいだしたのである。

《資料30》大岡信「戦後詩概観」（『蕩児の家系　日本現代詩の歩み』思潮社、二〇〇四年七月）

これは本質的にはロマンティストの言葉である。それはイリュージョン（幻影）と幻滅が、荒地という観念を媒介にして、完全に等置されている点にもあらわれていよう。幻影を抱くことも、幻滅することに、いずれ荒地というひとつの精神風土の上では等しいのである。それは歴史の容器から超脱したところではじめて完全に姿を現わす、ある超越的な価値の世界への、詩人の切ない反照として想い描かれた風景であったようにみえる。

ただ、鮎川氏の思想が読者を強く動かしたのは、たとえわれわれがイリュージョンとその等価物である幻滅によって支配されているとしても、そこから純粋詩的な観念へと逃げることは許されない、とする倫理のゆえだった。瞳は幻滅の風景にみひらかれながらも、決して単なる夢の、詩美の、超越の世界に詩を純粋化して逃避する途は踏むまいとする決意、それは日本のモダニズムの挫折を実際に見、かつ半ばは自ら生きてきた青年詩人の、必然の決意であったはずだ。しかし、幻滅をすでに予定さえしていた人々にとって、この決意は同時にきわめて困難な課題を課するものであったはずである。鮎川氏の文章は、超越へのやみがたい欲求と、それを否定し、乗越え、社会的存在としての詩人という観念をうちたてようとする倫理とのあいだで、きわめて苦しげな飛躍をみせる。（中略）

未来に幻滅を予感し、予定さえしている「必敗」の戦士が、しかも詩に無償性でなく、有償性を求めて戦うといい切るとき、そこに鮎川氏の、そして荒地的理念の、矛盾にみちた行程が浮かびあがっている。幻滅の人は、同時に、希望の人であろうとする。それは単純な論理によっては解決できない自家撞着ではないか。それを解決しうるものは、むしろ情念的な飛躍、愛の力しかないようである。不合理なるが故に我信ず。鮎川氏は、論理的には不可能とみえる詩の有償性獲得への鍵を、愛という、それ自体イリュージョンと幻滅に彩られた超合理的な情念のうちに求める。（中略）

僕はあまりにも僕自身の解釈にひきつけて鮎川氏の思想をたどりすぎたかもしれない。しかし、僕は、鮎川氏の詩論が持つことのできた衝撃力が、実は氏における現実と反現実の等量性、等価性にもとずいていたのではないか、という考えを捨てることができないのである。詩に有償性を求める、と言いながら、鮎川氏は実際には、到達不可能な目標を思い描いていた。無名にして共同なる精神世界を想定すること自体、すでに鮎川氏における「有償性」の概念が、具体的、個別的、部分的なものではなく、無限定な、全体であるところの一世界全部の領有をめざしていたことを意味している。この世界は、しかし純然たる仮空のものではなく、現実と等量、等価であって、ただし現実と対立している、ひとつの反世界である。言いかえれば、現実と相接しながら、現実とは逆方向にひろがっている、反現実の世界なのだ。この両者の相接する境界線に立つことができるかぎり、鮎川氏はレアリストとイデアリストの二種類の眼を同時に働らかせつつ、幻滅と希望の同時的な共存を語ることができたのである。

＊無償性、有償性について

【本文7】「Ⅰ　詩人の条件」

われわれにとつて、詩とはいつもこのように描かれる。純粋詩的観念が、いつも詩の無償性というものに凝結する場所で、われわれは逆に有償性を求めてゆくのであり、常に現代社会の荒地によ

つて或程度まで条件づけられた詩の有機的統一の中に、生の方向と生の中心とを見出してゆかうとするのである。現代の空気を呼吸して生きている人間にとつて、さまざまな問題が、ひとたび外に向つて表現される時には、絶望、苦悩、屈辱の色を帯びるということは、なんともやりきれぬことである。しかし詩人の精神は生々とした人々の間や生気に満ちた地球の上を活動しながら、人間の精神が内心ひそかに承認しているところの無名にして共同なる世界を見出そうとするのである。われわれの生活の向上にとつて、最も必要なものは、誰々の思想、誰々の観念と個別的に名指しされるようなものではなく、互に連帯して進み得るような源泉的感情の基礎を発見することである。

《資料31》鮎川信夫「ヴァレリイについて」（一九四七年八月）

ヴァレリイは「神は慈愛深く最初の詩句を無償で与える」と言っているが、われわれは、けつして詩句からして無償で受け取ることは出来ない。それにはわれわれの世代の特殊性もあろうが、現実から絶えずさまざまな観念を強制されつづけてきた者にとつて、詩の最初の一句は新たに生起する現実の生そのものから押出されてうまれてくる。その意味から言つて、我々は生そのものに固執せざるを得ず、純粋詩の観念は我々にとってあまりに芸術的に過ぎるのである。我々の自己証明の場は観念の有償性のうちにあるので、「何のために」われわれが作品を書くのかという問いに対する答えを不断に求めてゆかなければならないところにある。

《資料32》宮崎真素美「ヴァレリイ受容」（『鮎川信夫研究――精神の架橋』）

「「魅惑」の蔭にて」では、前述したようにある抵抗を持ちながらも揺れ、保留されていた「生」に対する意識が、ここにおいて自分にとっては選びとってゆかなければならないものとしてきっぱり語られている。

《資料33》鮎川信夫「アメリカ」に関する覚書」（「純粋詩」一九四七年七月）、

我々が受け取つた言葉はいつも有償なものであり、我々に現実的な犠牲を強いるところの言葉であつた。神から慈悲深く無償で受けとつた詩句のただの一行も我々は持っていない。我々の詩句の中には我々のさまざまな表情がどこまでもついてくる。我々は詩の芸術性に関しての根本的無償性という立脚点を放棄する。我々の青春にとつては、その無償性を追い廻したという一つの思出だつて、全く有償的な、相対的なものに過ぎない。

《資料34》宮崎真素美「ヴァレリイ受容」（『鮎川信夫研究――精神の架橋』）

この「「アメリカ」に関する覚書」という文章はその文体からも内容からも、戦後詩人として歩みはじめようとする鮎川のマニフェストと受けとめられる。鮎川の詩論の確立はヴアレリイ否定によって獲得されたと言ってもよく、「「アメリカ」に関する覚書」はそういった意味でも極めて象徴的な文章であるように思う。

※「「魅惑」の蔭にて」（一九四二年五月）→「アメリカ」に関する覚書」（「純粋詩」一九四七年七月）、「ヴアレリイについて」→「現代詩とは何か」の展開。「有償性」とは現実の生から自己証明を掴み取っていく態度であり、生に意味を与えるもの。現代人は「絶望、苦悩、屈辱」のなか生きている。だからこそ、「無償」で与えられる詩句を待っていては駄目で、「有償性」を求めていかなければならない。ちなみに、宮崎は「ヴアレリイについて」に引用されているヴァレリー『ヴァリエテ』が春山行夫「詩論（10）」（「新領土」一九三八年九月）からのものであることも指摘している。受容研究の必要性。

＊伝統について

【本文8】「Ⅴ　詩と伝統」

詩の西欧的伝統と言つても、ヨーロッパ人でないわれわれには、エリオットが正しく定義したような意味では、その立場に立つことは全く不可能である。エリオット自身が、詩の古典主義的、伝統主義的立場が滑稽に見えるほどの博学を要求すると云つて、自説の困難さを述べている程である。われわればエリオットが必ず読まねばならないと云つたところの古今の書籍の十分の一も読むことさえも出来ない。

【本文9】「Ⅴ　詩と伝統」

ある社会学者が、志賀直哉、谷崎潤一郎等、今日の文学的巨匠の作品も、日本人の思考、感情が儒仏思想によつて養われてきたという伝統を外れては全く考えられないと述べたが、詩の日本的伝統の場合も同様のことが言える。国語はそうした日本的伝統のなかで、幾多の思想的、文学的試煉を経て変化し、発足してきたのである。

だが現代に於ては、この立場にも難点が多くある。この日本的伝統を保持してきたところの、さまざまな制約や習慣が、ヨーロッパやアメリカ文明の影響によつて烈しく変化しつつあるし、西欧的文化と東洋的文化の相互滲透によつて、滅ぶべきものは急速に亡んでゆくからである。現在のところまだ日本的伝統と呼ぶべきものが、根強く国民感情の中に残存しているからといつて、いかに保守的伝統主義者であっても、少しも安心出来な

いに違いない。こうした社会変革の時期に於て、一つの革命は、容易にその国民感情を変えるであろう。第二次大戦の前と後とでは、すでにその国民感情は違つている。

【本文10】「Ⅲ　祖国なき精神」

戦争は僕たちにいろいろな教訓をもたらした。東洋と西洋の文化が混交して、一種独得の形で進展した近代日本の異端文明に対して、第二次大戦の結果はまさに世界の文明によつて下された審判であつた。それは日本の前近代的な社会の弱点を暴露すると共に、われわれの文化が伝統の力を全く持つていないことを明かにした。日本に於て伝統と考えられていたものは、すべて封建的な遺制に過ぎず、因習が心理的に固定化したものに過ぎないことが明瞭となった。

僕たちが戦争中日本の伝統といわれたまやかしものに対して反撥した感情は、今日では逆に正しい文明の伝統を求めようとする気持を、一種のロマンティシズムの形で支える源泉的な感情になつている。それは僕たちのあらゆる仕事の原動力といえるものである。

【本文11】「Ⅴ　詩と伝統」

真の伝統とは、過去から現在をつらぬいている価値ではなく、未来から現在へ、そして過去へとつらぬいている価値でなければならない。それこそ永続的価値と言うべきものである。未来から現在へ、これには何の手がかりもない、ということが理論的に欠点の如く思われるかも知れない。未来は果して如何なる文明の世界か、全く解らぬではないか、と言うかも知れない。僕には却つてこの未来の不明ということこそ理論的な強みと思われる。

現代に於て、未来の文明に関する二つの有力な仮説が存在する。唯物論的仮説とキリスト教的仮説である。日本がそれらの影響をまぬがれて存在し得ると考える者は全く世界の広さを知らぬものである。しかしそれが仮説であるかぎり、未来の文明は、それらと異なるかも知れない。しかし未来は世界の過去に含まれる、ということを忘れてはならない。未来は決して日本の、ではなく世界の過去から切離されぬ。そして未来は現在及び過去を審判し多くの収穫のなかから毒麦をよりわけるであろう。

《資料35》大岡信「鮎川信夫」（『現代詩人論』角川書店、一九六九年二月。『詩人の設計図』一九五八所収）。

ここで使われている未来とか現在とか過去という概念の驚くほど機械的な、つまり非時間的な性格について考えるとき、すでにそこでぼくは自分がこの文章を理解できないことに気づくのだが、しかしそれは一応度外視して、次のことを指摘しよう。未来は現在および過去を審判し、そこから悪しきものをよりわけるとするならば、過去にとっての未来である現在において、われわれが過去を審判しうるということは、鮎川氏の理論から当然導き出されるはずである。従って不明の未来を理論的強みの根拠とする鮎川氏の理論は、残念ながらきわめて薄弱な根拠しかもたないのだ。まさか唯物論的仮説やキリスト教的仮説を実現する世界が未来において忽然とあらわれ、そのときはじめて過去に対する審判が開始されるなどとは鮎川氏も考えてはいないだろう。ましてこういう図式を二十年も前にえがいてみぜたエリオットは、そんなことを言いたくてこうした仮説についてのべたのではなかった。重要なことは鮎川氏がここで、それまで「真の伝統の欠如」とか「殺伐な精神的風土」とか「特殊な異端的傾向」とか「地方的土俗的詩人」とか「擬似伝統」とかの言葉で現代日本の文化の在り方を審判してきたその位置からたくみに不明の未来の中へ姿をくらましていることだ。そしてさらに重要なことは鮎川氏がこうして自己の現在を消去し、従って過去や未来を語る権利を失っていることだ。時間は現在を中心にしてしか考えることはできない。鮎川氏にあっては秩序が転倒しているのである。（中略）

それならば伝統とは何か、とたずね返されれば、ぼくには答えようがない。伝統とは何か、という問いがぼくには現実感をもっていないのだ。伝統とはたしかに信仰とか言語とかによって形造られると同時に、ハシを使ったり、アグラをかいたりする習慣によって形造られるものであり、さらにどうやらこうしたものすべてを形造ってゆく一種の自然力でもあるとかしかぼくには言いようがない。そうした自然力はすでに与えられたものとしてあり、従ってこれを価値として要請することはできない。言いかえれば、ある観念なり習慣なりについて、もっと異なるものにすべきだといちことはできても、のっけから観念なり習慣そのものを要求することはできないのである。伝統について言えることといえば、それが変えうるものであり、また変えてゆかねばならぬものだということに尽きるように思われる。むしろ、これを変える力の伝承こそ伝統の本質的部分だとさえいえよう。伝統とは共存する形成力と破壊力であり、同時に存在する形成と破壊なのだ。しかしアグラをかく習慣を変えることが緊急に必要なのではない。詩人にとって必要なのは、いうまでもなく言葉を変えることだ。早い話が鮎川氏をはじめ『荒地詩集』の詩人たちが今日までになしとげてきたことで最も意義があり、また詩人としてのこの人たちの独

自性を決定しているのは、けっして「現代は荒地である」という風な現実観の存在を知らせたことにあるのではなく、この人たちが日本語を、少なくとも詩の分野で、変えた点にある。しかし日本語を変えるという言い方は不正確だ。実際は語の組合せによる言葉の秩序、つまり意味の秩序の新しいあり方を提示したということであり、別の言葉で言えば言葉のパタンを変えたということである。

《資料36》北川透「《伝統の欠如》について」

しかし、《伝統の欠如》という認識に、いくらかでも根拠があるのであれば、鮎川が〈未来〉という概念を、どういう文脈で定立しているかは、もう少し検討してもよいと思う。そうすると、引用しながら大岡が触れていない箇所に、《未来は世界の過去に含まれる》ということばがあることに気がつくはずである。この《世界の過去》とは何だろうか。それを、鮎川がそれなりにやっている、この規定に至る展開から抽出してみることは可能だろう。つまり、西欧的伝統にも、日本的伝統そのものにも、即自的に依拠することはできないが、世界の中で激しく変化している現代日本そのものに拠り所は求めざるをえない、永続的価値（伝統）を、その《現代に生きるわれわれ自身の中》から見出すために、ダンテやシェークスピアを知ることが必要だし、世阿弥や芭蕉に学ぶことが必要だという論理である。わたしなりに言いなおせば、《伝統の欠如》を媒介にしながら、世界の中から〈持続的価値〉を含む文化的遺産を求め、それを新たな価値の源泉にしようという態度であろう。

《資料37》北川透「《伝統の欠如》について」

それにしても、わたしは鮎川の《伝統の欠如》のモティーフが、何故、負（マイナス）の伝統という概念を生みだせなかったのか、ということが残念である。それは、鮎川の言うような《一グループ、一世代を支えるに過ぎない一時的な信条》を指す《擬似伝統》のことではなく、風土的・社会的あるいは宗教的遺制と結びついた、それ自体累積された支配力、規範力のことである。《伝統の欠如》とみえる、わたしたちの詩や文学の問題も、実はこのような負の伝統、マイナスの規範力とのたたかいや敗北の、内的な過程にほかならぬと思う。このような負の伝統との主体的なたたかいが媒介になって、〈世界〉が課題になるのでなければ、〈反復〉がたえず新しい〈生産力〉となるような持続的な価値の形成はむずかしいにちがいない。

《資料38》大岡信「鮎川信夫」

ぼくの言いたいことは、結局詩人が詩を書きつづけている間は、彼は世界の上に自己の名において詩という具体的なものをつけ加えるのであり、このとき彼は形成力と破壊力とを一つの詩の中に現実化するという行為によって、否応なしに伝統のにない手となっているということである。行手に伝統があるのではない。彼がすでに伝統のまっただ中におり、伝統はまた彼の中にあるのである。それならば彼はその伝統をになってどこへ行こうというのか。これこそぼくがこの小論を書くに当たって鮎川氏にたずねてみたいと思ったことだった。しかしはからずも、ぼくは逆に遡行することを強いられたようである。

《資料39》中原中也「詩と其の伝統」（「文学界」一九三四年七月）

ところで、他の事ではいざ知らず芸術では伝統といふものは大変有難いものである。それを肯定するにしても否定するにしても、まづそれがあつてのことなのである。

扨、日本の詩の伝統はと見ると、（茲では明治初年井上博士に依つて新体詩と銘名された、泰西の詩を見てから後の詩のことを云ふ）余り豊富だと云ふことが出来ない。おまけにそれが短歌や俳句の延長でなしに、純然たる詩の様態を持してゐたのならばともかくも、事実それは屢々短歌や俳句の延長であつたといふか、それらの形の崩れたものであつた。短歌や俳句がちやんとした娘ならば、詩の多くは云つてみればおひきずりであつた。而も兎も角も詩の格を備へたものは、概して概念的であつた。

何れにせよ、わが詩の伝統は未だ微々たるものである。而して「伝統がない」、謂はば「型がない」とか「見本がない」とかいふやうなこと程、詩人にとつて辛いことはないのである。詩人が辛いばかりではない。読者も亦辛いのである。――とまれ無形の期待なぞといふものはない。期待がこれと口に云へない場合にも期待がある限り期待が期待してゐるなんらかの「型」、といふものはあるのである。つまり予想出来るその型がないので、大衆の方では詩人に期待しようがものはないのである。するとなると、今度はそのことは詩人にとつて辛いのである。詩人が孤立するからといふのではない。芸術といふものが、普通に考へられてゐるよりも、もつとずつと大衆との合作になるものだからである。

■評価

《資料40》村野四郎・木下常太郎「解説」（『現代の詩論』宝文館、一九五四年一一月）

本文はおしゃべりと身振の多い文章であるが反モダニズム的詩精神を述べた特徴が見られるであろう。この文章ではモダニズムが詩の形式や方法に関する芸術論に中心を置くものと仮定されて批

判を受けて居るが、詩が詩の形式や方法について思考を集中しないで、どんなすぐれた詩が創出されるであろうか。詩が現実の素材と経験に基礎を置くことは当然であるが、単にそれに終始して詩の形式や方法について無智であつたり不消化であつたりしたならば、優れた詩は創造出来ないであろう。本文のモダニスムの詩人というのが、現実にいかなる詩人を指示しているかは分別しないが、そう批評することによつて「荒地」の詩人が詩の形式や方法を軽視するならば、その詩は真の現代性を失うであろう。プロ派が政治に偏向することによつて優れた現代詩が創造出来ない如く、「荒地」は経験に偏向することによって優れた詩を産み得ない弱点を持つている。「荒地」が文学文明としての過去の美学を無視するならば、まず自ら優れた形式と方法を創造しなければならないであろう。

《資料41》大岡信「戦後詩概観」

右に見てきたような鮎川信夫の思想は、すでに明らかなように、きわめて稀薄な空気の中でのアトラス的苦闘なしには、貫き通すことのできないような、それ自体矛盾に満ちた思想であった。戦後の緊迫した幻滅感――幻滅もまた緊迫した精神の所産である――を養分にしている間は、この思想は、みずからの矛盾をむしろ原動力として働らくことができた。だが、幻滅もやがて終る時が来るというのは、恐るべき人生の真実である。そして幻滅の消失は、他方で、イリュージョンの消失とも同義であった。「俗な市民」の生活が、その全容を現わしてくる。だが、イリュージョンと幻滅とを経過したのちに全容を現わしてきた俗な市民生活は、もはや単純な市民の生活そのままではあり得ない。それは十分に失望し、十分に自己を蔑視し、十分に世界の退屈さを知っている「俗」である。それはまた、十分に批評的である「俗」なのだ。

《資料42》大岡信「戦後詩概観」

戦後派としての荒地グループの、出現から解体までの、時間的にいえばさして長期間とはいえなかったひとつの歴史も、今のべたような経過をたどったということができる。荒地グループが、運動としてきわめて鮮やかなひとつの航跡を残し得た理由は、さきにもふれたように、このグループの少なくとも初期における否定の意志の徹底性にあった。そしてこの否定の意志そのものが一個の日常的姿勢として固定するにつれて、このグループの、運動としての力は消失していったということができる。言いかえれば、死者の中の生き残り、一個の異物、異邦人としてこの社会にかえってきた荒地的人間が、この地上でやはり生きつづけねばならないことを自覚したときから、戦後派としての荒地グループは変質せざるを得なかったのである。

《資料43》吉本隆明「日本の現代詩史論をどうかくか」（「新日本文学」一九五四年三月。引用は『現代詩論大系』第一巻、思潮社、一九六五年四月より）

現代詩の第二期は、潜在的には、第二次大戦中にはじまるといえるが、特長としては、戦後「荒地」グループの出現と、プロレタリア詩のこの時期の変せんによってはじまるとかんがえられる。「荒地」グループは、「詩と詩論」系統の詩意識が、日本の敗戦革命の挫折と、政治社会経済状態の混乱や疲へいを、受感したとき、それによって出現した。かれらは、日本の近代詩史上、はじめて、ほんとうの意味での思想性を詩のなかにみちびいた。かれらの詩の方法が一種の古典主義にかたむき、かれらの詩の主題が、いちじるしく倫理的であることは、そのまま、かれらの出現の意味を保証している。かれらの詩が、戦争あるいは戦場の体験というような、極限情況のなかでうたわれるとき、不思議にいきいきとしてくるのは、それがほんとうは、敗戦革命の挫折にゆがんだ戦後のインテリゲンチャの意識を象徴的につたえ、そのうしろにある混乱し疲へいした敗戦日本の秩序意識を反映しえているからであった。「荒地」グループは、その極限情況の体験が現代の日本の社会情況のなかで、実感しえるあいだ、その存在の意味をうしなうことはないとおもわれるが、すでに、敗戦革命は完敗し、よみがえった日本の戦後資本制が、安定恐慌期にはいろうとしている現在、あきらかに転換をしいられている。かれらのもとめる極限情況の実感は、もはや、現実からうしなわれてゆくだけである。かれらは、その倫理的な衣装をかなぐりすてて、市民的なトリヴィヤルな日常性を方法化してみせるか、あるいは、秩序への抵抗意識を詩のなかに固定して参加の意企をしめすか、あるいは、その倫理性を内閉させて観念的な上昇をとげるか、とにかく、早晩、日本の現実の情況が、かれらに選択を強いるものと思われる。

CENDRE 1

評論

精神の岐路　黒田三郎
アメリカのYOUNGER GENERATION　北園克衛
前進する作曲家たち　塚谷晃弘
すでに國民の多くはアウアンギャルドである　三木　俱
形づくる意志　山中散生

詩

田村隆一　長安周一
佐藤英哉　村上充子
山中散生　高島順吾
木津豊太郎　伊藤正齋
田澤　弘　志村辰夫

定価 20円 〒3円 3ヶ月70円

VOUクラブ

発行所・東京都大田区馬込町西1-1649
申込所・ハガキ書房（東京神田錦町1-8 総書店電58[illegible]番）

一次號予告

20世紀の詩と批評

月刊 **荒地** 1948年 ¥.20-

作品

地球の暗い部分　田村隆一
神の歌　牧野去太郎

評論

Xへの獻辞　荒地同人
抽象芸術について　山中散生
T.E.ヒュームの芸術論　三好豊一郎
最近のハクスレイ　西村孝次
スペンダアの破壊的要素について　加島祥造
誘惑　西脇順三郎
返信　中桐雅夫

直接購読 概算 ¥120

東京都中央區日本橋芳町2-3

東京書店

20世紀のアンソロジイ *1948年*

日本現代詩の頂點！

荒地詩集

殘酷時代　北村太郎
墓地の人、微光、沈默、投影

黒　田村隆一
坂に關する詩と詩論、生きものに關する幻想、目擊者、腐刻畫、月光、灰、秋、聲、冬の音樂、黄金幻想、沈める寺、祝福

暗い構圖　鮎川信夫
死んだ男、姉さんごめんよ、アメリカ、トルソについて、秋のオード、行人、1948年

彼方　三好豐一郎
囚人、青い酒場、四月馬鹿、窓、再び！、室房にて、アルバトロスの首、彼方、magic flute、夜の神から

時代の囚人　黒田三郎
道、歳月、自由、體驗、時代の囚人、一人の女に、聲明、豫見、あなたの美しさにふさはしく

豫告

上製紙使用
A5版
280頁
豪華本
寫眞・デッサン6葉
豫定定價 200圓

部數限定につき葉書にて豫約をお申込み下さい、
發賣豫定日四月上旬

裝幀 北園克衛

東京書店

梅光女学院

J·62·A
910.5
97-2-2
63.1.26

荒地　第六輯

作品

手……三好豐一郎…二
不覺の使者……疋田寛吉…五
Merry-go-round……草飼稔…八

評論

現代イギリス文學特輯

破壊的要素（スペンダーとオーデン）……加島祥造…三
T・E・ヒュームの遺したもの……三好豐一郎…三四
不安の年……中桐雅夫…四六
抽象藝術に關するノート……山中散生…五八
舊き友へ……黒田三郎…六二

·1948年·

荒地詩集

黒田三郎　鮎川信夫
田村隆一　三好豊一郎
北村太郎

親愛なるX……。君は此処に於て、言葉への敬虔な信頼の念と、孤独な一つの特權的状態なくしては成立し得ない僕達の詩が、現実との摩擦から烈しい試錬のまへに立たざるを得ないことを認めてくれるだろう。僕達がかうした精神の不安の習性に促られてゐること自體が、最も端的に荒地の暗澹たる風土を説明してゐる。
（序文『Xへの獻辭』より）

東京都中央區日本橋芽町二丁目三番地
東京書店

全288頁・極美・豪華本・A5判
部数限定・直接申込を乞ふ
定價 200圓